住井すゑとその文学の里（三十五）

ー牛久沼のほとりー

牛久市文化財保護審議委員　栗原　功

川ぴたりの餅にも飽けよ痩河童　ー小川芋銭

『川ぴたりの餅にも飽けよ痩河童』は、小川芋銭が昭和9年（1934年）に詠んだ俳句である。

川ぴたり餅については住井すゑが、暮らしの手帖社刊のエッセイ集『牛久沼のほとり』の中に書いているのでそのくだりを次に記してみた。

―川ぴたり餅は毎年旧暦の十二月一日の早朝に搗くのが習わしで、沼畔の家々では小皿ほどに丸めた餅のいくつかを、ほかほかと温かいうちに、沼に注ぐ小川に投げ入れた。河童供養のためだ。というのは、河童は本来、胡瓜が好物。そのため夏場は沼に近い畑の胡瓜で空腹知らずにくらしているが、冬に入ってはこれという食べ物も見当らず、おそらく飢餓に瀕しているにちがいない。そんな折柄、うまい餅を施してやれば、河童はその恩義に感じ、次の年の夏、沼で泳ぐ子供たちに危害を加えない…。こんな言い伝えがむらには生きていたからだ。

私は小川に架かる橋の上に足をとめ、沼に向いてゆっくりころがり流れる餅の姿を何度も眺めた。だが、敗戦はこの風物詩をゆるさなくなった。厳し過ぎる食糧の統制下、人間が冬の河童よろしくうえに苦しむ中では、沼畔の人にも川ぴたり餅の夢を捨てるしかなくなったのだった。

―河童はもともと水神として人々の信仰を集めていたのだった。ところが、河童信仰が廃れると人々が、今度は河童が人間（特に水泳をする子どもを狙う）や馬などを沼、池、川の深いふちへ引きずり込むものと恐れるようになったのだ。同時に河童を想像上の水陸両生の妖怪に仕立て、さらに戯画としても描くようになった。一方の『川ぴたり餅』の「川ぴたり」とは、川浸りのことだ。河童を恐れるようになった人々は、旧暦の12月1日を〈川浸りの一日〉と定めて、毎年この日に餅をつき、団子をこしらえて沼、池、川へ投げ入れるようになった。この習慣が川ぴたり餅と呼ばれて徐々に全国各地へ広がったのだ。河童に人々（特に子ども）が、沼、池、川の深いふちに引き込まれないようにと、おおむね水難よけのための習慣になったのだ。

小野川流域の集落でも行われていた習慣『川ぴたり餅』

本市の西北から東南にかけて流れる小野川は、かつて蛇行して緩やかに流れていたが、土地改良施行後に今の流れになった。

小野川両岸の台地上には純農村岡田村が広がっていた。岡田村が明治45年（1912年）に制定した村歌の歌い出しに『波山の南霞浦の西　小野の流れの清む所』とあり、岡田小学校旧校歌の歌い出しには『流れも清き小野川の』とあった。岡田小・中両校に学んだ男子の大半は、〝流れも清き小野川〟で、汲みけ（※）、魚釣り、泳ぎを体験している。

小野川流域の集落に先祖代々住む70歳代の男性によれば、子ども時分に両親や祖父母によく『小野川にいる河童に引き込まんねえように気を付けろ！』と言われたという。

その小野川の最上流沿いの東猫穴、下って中根、下根、さらに下って柏田、小坂でも川ぴたり餅の習慣があった。が、城中と同じ時期に途絶えている。中根では個人的にごく最近まで水難よけに川ぴたり餅の習慣を続けてきた人がいる。

⬆文人画家（南画を描いた画家を指す）小川芋銭が描いた『遊戯三昧（画集河童百図より）』ー牛久市所蔵。芋銭が描いたかっぱはユーモラスなものがあるが、鋭い風刺が込められているものもある。

➡水天宮所蔵かっぱの掛け軸。筑後川（熊本県阿蘇山北側に源を発し、筑紫平野を経て有明海に注ぐ）流域では水天宮のお守りを身に着けているとかっぱに悪事をされないという信仰がみられる。ー全国総本宮水天宮社務所（福岡県久留米市）提供ー

⬆土地改良以前の小野川は川幅の広いところがあった。この風景は東猫穴側から対岸の大井を望む。東猫穴出身の池田弘氏が描いた。『東猫穴誌ー里の風土記』より。発行東猫穴誌刊行委員会。

※汲みけとは、夏場の渇水期にまず小野川を7、8mの距離をおいて2カ所土手の土で盛って仕切る。次にその中の水をバケツでくみ出す。すると、コイ、フナ、タナゴ、時にはウナギが捕れた。シジミも採れた。